今回は、最上川舟運の代表的な積荷だった青苧、その栽培方法と製品化について、大谷の志藤富男さん、白田千代志さん、堀敬太郎さんより教えていただきましたのでご紹介いたします。

朝日町宝ノート　No.0703　「青苧の栽培と製品化」

青苧を売り物にするには、ただ自生するからといって出来るものではなかった。きれいに育つように相当手入れをしていたんだ。枝など出てしまうとダメだし、長さもなんぼ以上と規定があった。短いのや枝が出てしまったものは、家庭用として使っていた。

刈ったものは、束にして水に浸けていた。普通の井戸では無理だったから、長掘に重石を載せて浸けていたような気がするな。それを背負ってくるので、一束でも相当重かった思い出がある。

水に浸けた後は、皮をはいで輪のように丸くおっくり置いていた。剥ぐ人が広げてすぐできるようにしていた。

はぐのも人によってかなり差が出たな。すっとできる人もいれば、途中でもげてしまう人もいた。私の家では、上手な人を特別に頼んでいた。

売り物の青苧は、先の方をきれいに筆の先のようにして格好よくしていた。どうやっていたかは覚えてないが、じいさんがなめながらしていたような覚えがあるな。本当にのり付けしたようにきれいになっていた。

最後に一束ずつ天日に干して、真っ白く仕上げていた。売り物として出荷するには、色や形は大分やかましく言われていたな。特に色が重要で、真っ白い物が一番だった。

（志藤 富男さん）

青苧は、おがるほど良いと聞いていた。青苧の高さは２m以上あったから、育てるのに肥やしのようなもの、おそらくたい肥を使っていたのではないかな。

それから青苧の芽が出るのは霜がおちなくなってからだから、霜は心配なかったな。

本当に青苧は高く売れた。だからみんな一生懸命していた。

私の家には青苧はぎの道具も残っているが、はぐ時に使う‘引き板’は、度々新しいものを重ねていくことで、弾力が出てやりやすくなったんだ。　（白田 千代志さん）

昔から、茎から繊維をとる青苧は、大切な衣料の原料となり、主に夏季衣料に用いられ、奈良さらし、越後縮、近江蚊帳などの原料となった。

元治元年（1864）「最上名所名産名物番付」の横綱は最上の紅花で、その次が最上青苧になっている。その青苧の半数が「五百川苧」「七軒苧」が占め、名産として格付けされていた。今で言えばメーカー品のようなもので高い値で取引されていたといわれている。

しかし、その青苧も明治の末頃から養蚕業の発達によって、畑地は桑が主流を占め、衣類も高級な絹織物に変わった。そのため青苧栽培は衰退してしまったようだ。　（堀 敬太郎さん）

取材日 / 平成 19 年 8 月 22 日
取　材 / 柴田圭一

左より　堀さん、志藤さん、白田さん

プロフィール

志藤　富男さん	昭和 3 年生	農業	大谷六在住
白田千代志さん	昭和 3 年生	農業	大谷五在住
堀　敬太郎さん	昭和 3 年生	ｴｺﾐｭｰｼﾞｱﾑ案内人	大谷一在住